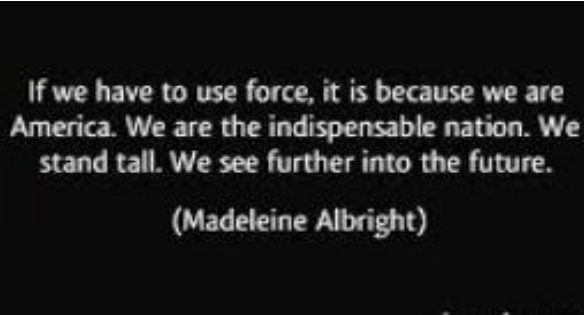


“不可欠の国家” アメリカの内部爆発

【訳者注】ペンタゴンは完全に末期症状を呈している。かつてペンタゴン（やNSA）で実務を担当していた、この女性の暴露と分析は鋭く、恐ろしい。海外の戦争でさえ、ろくに報道されないのだから、ペンタゴンやCIAの内部で何が起きているかは全くわからない。しかし、遠からず我々は、文字通り“信じられない”ニュースに接するのではなかろうか？ こういう戦争や治安に関する官庁で働く人々の、すべてが悪玉でないことは、容易に想像できる。かなりの反エリート、反軍国主義、反警察国家の人々が、給料をもらいながらも、悶々とした思いでいると思われる。隠れプーチン派もいるだろう。「殺し合い官僚戦争」も起るだろう。同時に彼らは、この悪なる構造を崩しては生きていけないという現実縛られている。オバマが「周囲に裏切り者がいないか、お互いに監視するようにしましょう」と言っているビデオを見たのはだいぶ前のこと、CIA内部の生々しい仲間割れを告白（告発）した手記を訳したのも、だいぶ前になる（2014/12/17）。いずれにしても、持ちこたえられないのは確かである。

By Karen Kwiatkowski

October 2, 2015, Information Clearing House



If we have to use force, it is because we are America. We are the indispensable nation. We stand tall. We see further into the future.
(Madeleine Albright)

「もし我々が武力を使わねばならないとしたら、それは我々がアメリカだからだ。我々は不可欠の国家だ。我々は抜きん出ている。我々は未来を見通すことができる。」(マデレーン・オールブライト)

アメリカ人は、自分たちは不正に反逆し、自由を擁護し、1776年には新しい共和国の模範になった、と考えたがる。現代のアメリカ帝国に至る、この実験的な小さな先駆者という考えは、世紀を重ねるうちに消失してしまった。自由と反中央集権への愛、個人の独立と自分自身の伝統を打ち建てる権利、また自分の城の主であろうとする渴望——そういったものへの人間的あこがれは残っている。しかしそれらは、2015年のアメリカでは遠くかすんでしまった。

120年以上にもわたって、我々アメリカ人は最上の、最強の、最も影響力のある、そして最も羨まれる国に住んでいるという神話が、過去・現在の何十億ものアメリカ人に、強制的に教えられてきた。こうした信仰は、1世紀間のネオコン思想と一体のものである。これらの信念は、ティーパーティ運動と、それより前の、改革とブルムース (Bull Moose) 党の名残をつなぎ合わせるものだ。それらは、民主党の社会主義者バーニー・サンダース (Bernie Sanders) の大衆的なレトリックを下支えしている。クリントン家とブッシュ王朝が、これらの信念を抱いていて、これを宣伝し、結果として、大衆の間に確固とした合法性の土台を築いた——いかに我々がこれら特定の候補者に不信を持とうと関係なく。ポピュリスト民主党 - 共和党のドナルド・トランプ (Donald Trump) のレトリックが、アメリカの例外主義と軍国主義についての根深い信念を、完全に調和させている。

<https://www.lewrockwell.com/2014/12/paul-craig-roberts/how-close-are-we/>

2016年大統領選の選択は、明白で、単一で、無関係である——いま世論調査をリードしているどんな人間でも、大統領として受容可能だろう。そして両党とも、ワシントン DC は宇宙の中心であり、世界の不可欠の首都であるという観念に裏打ちされた、国家崇拝において一致している。大衆が「どんな種類のアイスクリームがいいか？」と問われたとき、本来問われるべき質問——実際に訊ねることはできないが、生き残りそのもののために必要な質問——は「我々はこれ以上必要だろうか？」というものだ。多くのアメリカ人がいまだに、もっと必要だと言っている。おなじみの資本家階級、政府とつながった銀行家階級、全国よろめいている政府の居候たちは、確かに、もっと必要だと言うだろう。彼らはもっと要求するが、もう取れなくなったら、早々と苦しみながら絶滅していく。

我々の大恐慌時代のおじいさんたちは、レモンをからからに絞って、皮まで利用した。現代のワシントン DC の居候たちも同じだろう。彼らは、盗んだ GDP の山分けと、さらに将来の GDP から盗んだ援助金で、生活しているからだ。これらの生物たちは、税金の前借と、不明朗な借金で養われていて、その財源をからからに搾り取り、残ったものをも使い果たしたら死ぬだろう。

この連中が諦めたというときは、本当に何もなくなったときである。官僚の生き残り戦争では、武器をもった者と人気のある者が有利である——つまり武器だ。これが常に、暴政と帝国の最後の姿である。昨今、軍人と警察官の人気が高いのは、ここに生き残りのパワーがある、軍事国家なら食いはぐれがないという、無意識の感覚が働いているのかもしれない——犬が犬を食うように。

したがって、政府の福祉政策や、保守的“価値”を主張する者たちは、国家強制力の使用を大胆に擁護し、膨大でかつ成長する軍事官庁の存在や、その予算をさえ、脅かすようなこと

は本能的にしない。官庁の狼たちは、冬の寒風が近づくのを予感して、海外では戦争を拡大し、国内でも軍事的存在を拡大することによって、それに備えてきた——軍隊化された警察行動、膨大で浸透力の強い、政府による監視、市民の動き、投資、取引、そして全く無能だが驚くほど役に立つ、“祖国”安全保障インフラストラクチャーによる文書記録、などを通じて。

我々の国家の存続の“必要”という、無意識の感覚が、軍国主義の重装備国家の価値を我々に植え付ける一方で、現在、十カ国以上で行われている戦争——詳細はなぞで、動機は複雑、機械的にしか報道されず、すべての大政党やメディアによって祝賀される——こうした戦争のすべてが、道徳的根拠と物理的領土を失いつつある。ペンタゴンは、その“戦争”予算を正当化するものがなくなったと嘆き、独立しているために、“通常の、戦争でない”絶えず拡大していく作業の予算が犠牲になっていると怒鳴る。これが指しているのは、この3世紀目のアメリカが、世界最大の実体的軍隊のために、内部爆発を起こしているだけでなく、この機関が、地上最大の軍隊として自分自身を維持するために、**独立して**戦争予算を要求しているという事実である。

<http://www.nytimes.com/2015/09/21/world/asia/us-soldiers-told-to-ignore-afghan-allies-abuse-of-boys.html?smid=tw-nytimes&smtyp=cur&r=0>

今日、“不可欠の国家”は、ワシントン DC に中心があるのでなく、ニューヨークでさえない。今日、今日だけは、その中心はモスクワにある。何という魅惑的な話であることか——以前のソ連官僚、どこから見ても現代の独裁者である男が、現在のアメリカの敵という悪名を踏みにじって、決断と意志を見せつけたということは！ プーチンが、恐れられたシリアの匪賊 ISIS に空爆を加えて成功したことは、アメリカの幻想に対する大きな、イデオロギー的な挑戦であり、ワシントンの政策決定者を骨の髄まで震撼させるものだった。

ISIS が（中東の最後の独立した世俗的リーダーを倒すための、アメリカ製の手段でなく）アメリカの敵だという、ネオコン共和党支持者のはらつたりを指摘することによって、この新しい不可欠の国家（あるいは少なくとも、プーチンと彼の軍隊）は、思いがけなくも、アメリカは不可欠という、人民を駆り立て結束させる神話を、吹き飛ばした。彼は、一度の速やかな動きで、問題を明らかにし、同時にワシントン DC 集団の正体を暴いた。

別の時代だったら、生意気なプーチンと潜在的に生意気な中国についての、ワシントンからの怒号が、群衆をけしかけるのに役だったかもしれない。しかし、イギリスがアメリカの植民地を失う直前の時代がそうだったように、現在のアメリカの王様、現代版ジョージ 3 世は、キチガイで悪魔にとりつかれ、浪費家で、借金だらけで、好ましくない人物と広く信じられている。彼に反対する者たちの人気は——すべて国家主権論者、軍国主義者ではあるが

——彼らがいかにうまく、この王様は裸で、嘘つきで、無能な傀儡で、倒すべきだという、高まってきた現実的な見方を、説明するかにかかっている。

しかし帝国における民衆対策は、すべてを消費する強力な中央国家の、官僚の生き残りに比べることはできない。プーチンの動きは、アメリカ戦争国家をすぐにも終わらせる、うまい、否定できない基本理由を与え、一気に、ネオコンと RNC、DNC（共和・民主全国委員会）の中心思想を崩壊させた。しかし、この知らせはまだ津々浦々にまで届いていない。そこで我々が予期しなければならないのは、それが直ちに伏せられ、政府の御用メディアによって都合よく利用されて、更に多くのワシントン DC の出費、主張、軍国主義の理屈付けに利用されることである。トップに立つ大統領選候補者は、間違いなく、彼らの演壇を利用して、何よりもまず、この国家の必要を弁ずるであろう。

ワシントン DC は焼き討ちに備えている。国家のパニックは、彼らは何の患もなく爆弾を落とすようになったからかもしれない、高圧的な政府のシンボルに対する国民の反乱への恐怖からかもしれない。私の憶測では、この国家のパニックは、崩壊する帝国の自暴自棄になった首都で加熱してきた、殺し合い（internecine）官僚戦争のためである。（深層）国家内部のテロは、即効的症候を呈する。それが国家テロである。

<http://cnsnews.com/news/article/susan-jones/hhs-boosting-nations-stockpile-burn-treatments-case-nuclear-attack>

ロシアが、“不可欠の国家アメリカ”という神話の、直接の爆破に成功するとともに、我々は、真の自由をめぐる長くかかった戦いを、用心して祝ってもよいかもしれない。しかし我々は、その直後の結果には、最悪の事態を予想すべきで、この先数か月は、我々のよろめく、自暴自棄の、中央政府の示す狂乱状態を、過小評価してはならない。

（カレン・U・キアツコフスキーは、アメリカの政治活動家、評論家。彼女は、退職米空軍中佐で、彼女の担当任務には、ペンタゴンのデスク将校や、さまざまな国家安全保障局（NSA）の役割が含まれていた。）